

私の戦争体験

「ぜひともこれだけは、子どもたちに知ってほしい」

お話：藤森 菊三さん(若草町在住)
(平成 28 年 4 月 7 日 FM ちゃお放送)



司会

藤森さんは、大正 9(1920)年生まれで、これまで 20 年近くかけて、約 2 万人の方にご自身の戦争体験を話されました。講話をした学校の子どもたちからもらった感想文は 1 万 5 千通を超えたそうです。それでは、藤森さんの生い立ちについてお話いただけますか。

藤森さん

私は、山口県の出身ですが、小学生のときに、姉が結婚し、満州の大連へ行くことになり、私も一緒に行きました。その後、日本に戻り、学校を卒業して、住友で働くことになりました。初めは、尼崎で働いていましたが、住友が国策により満州で工場をつくることになりました。私は以前、満州に住んでいたことがあったので、満州に行くことになり、奉天の工場で 23 歳まで働いていました。20 歳のときに徴兵検査を受け、身体検査は合格しましたが、親や兄弟を亡くしていたこともあり、兵役は免れていました。しかし、私が 23 歳のとき、日本の戦争の状況がだんだん厳しくなってきたため、私のところへも赤紙が届き、軍隊に入ることになりました。赤紙が届くと 1 週間以内に軍隊へ行かなければいけませんでした。私が入った軍隊は、満州北部のソ連との国境付近にあり、2 月の初め頃から半年間そこで訓練を受けました。

司会

どういったことをされておりましたか。

藤森さん

国境付近は、二つの丘をはさんでお互いがらみあっている状態でした。夜になると、ソ連側のほうで、赤い火や青い火がポーンと浮かび上がったり

しました。それらは、脱走兵が出たとき等のサインでした。そのサインを見た私たちは、こちら側にいつやってくるのか分からない敵の兵隊を迎えなければならず、緊張の中で警備していました。気温はマイナス 40 度になることもあり、そのような寒い中、マムシをかじったりしながら寒さに耐えていました。時には、20 頭近くのオオカミがやってくることもあり、気味の悪いオオカミの鳴き声が聞こえると、人一人分のたこつぼのように掘った穴に、身を隠して銃だけを外に出したりしていました。

このような過酷な状況の中でも、今のように携帯電話などの便利なものはなかったので、味方と連絡するために、長いひもを張って、石を入れた空き缶をいくつかぶらさげておいて、合図を出し合っていました。中にはあまりの寒さに耐えられず、死んでしまう者もいました。

司会

そのときは、どのような思いでしたか。

藤森さん

とにかく命さえあればよいという思いを持っていました。そのような警備を続けていた頃、私は隊長から、「お前は将校になる見込みがあるから勉強するように」と言われました。それからは、消灯の時間になり、みんなが寝たあとも、私は隊長の部屋で灯りをつけて、勉強するようになりました。昼間は演習で、夜は勉強という日が続き、とても疲れましたが少しの辛抱だと思い頑張っていました。半年くらい経った頃、私は試験を受けて、兵長という言わば幹部候補生になりました。そして、その頃、私の隊に移動命令が出て、フィリピンと千島列島へ半々に分かれて移動することになりました。私は、フィリピンへ行くことになっていましたが、移動前日の夜に隊長から突然呼び出され、何かまずいことをしてしまって叱られるのかなとびくびくしながら隊長のもとへ行くと、隊長から「お前はフィリピンに行かなくてよい。四国の士官学校へ行け」と言われました。私はフィリピンに行かず、四国の観音寺へ行きました。

司会

フィリピンや千島列島に行かれた方はどうなりましたか。

藤森さん

それから一週間くらい経って、私が聞いた情報では、フィリピンに行った隊は、レイテ沖で全滅したということでした。私の隊長も亡くなりました。しかし、千島列島に行った隊はみんな生き残ったようです。私は、四国へ行くように言われたため、命を落とさ

ずにすんだのです。

司会

四国に行かれてからはどういったことをされましたか。

藤森さん

観音寺では、人間魚雷といって爆弾を抱えて敵の軍艦へ突っ込むことを教えられました。「一人で千人を殺せ」と言われていました。その訓練を朝から晩までやっていました。訓練とはいえ、命がけで、訓練のときに命を落とした者もいました。私自身も死ぬことを覚悟していました。

司会

藤森さんは、人間魚雷にならずにすんだのですか。

藤森さん

人間魚雷になることはありませんでした。日本が戦争にだんだん負けるようになり、本土防衛にそなえる必要が出てきたため、私は鉄道隊に変わりました。鉄道隊に編入するため、私は千葉で2ヶ月くらい教育を受けて、将校になりました。そして、日本の戦争が本土決戦のような状態になっていたこともあり、私は故郷である山口を守るよう命じられ、岩国へ行き、兵隊100人を指揮・監督することになりました。その頃、岩国では、毎日のようにアメリカの飛行機B29が頭の上を飛んでいました。B-29が飛んだあとには、数本の飛行機雲ができていました。B29は1万メートルくらいの高さを飛んでいるため、地上から高射砲を打っても届きませんでした。

司会

そうして、岩国にいたときに1945年8月6日の朝を迎えられたそうですが、当時の様子をお願いします。

藤森さん

岩国には、海軍もあり海軍の隊長の依頼で、私は、半数くらいの部下を岩国港棧橋に派遣して、砂糖の荷揚げを手伝っていました。8時15分、私は倉庫の2階から部下を監督していましたが、外でピカッとものすごい光が光りました。すぐに私は、屋上へ上がりましたが、外は青空で晴れており、おかしいなと思いました。それから2分程度経ったときにもものすごい音がして、きのこ雲が目の前に迫ってくるように上がっていくのが見えました。

私はびっくりして、これは呉か広島の実験庫か軍艦の火薬が爆発してしまったのではないかと思います、

すぐに電話しましたが、呉も広島も全く通じませんでした。これは大変なことだと思い、機関車の石炭を積むところに衛生兵を含む兵隊10数名を乗せて、わずかな消毒薬などを持って広島へ向かいました。

司会

広島に向かう道中はどうでしたか。

藤森さん

広島に向かう途中、廿日市という駅で機関車を止めました。周辺の人があまりにも騒いでいるのをおかしく思い、理由を部下に確認させに行かされたのですが、その部下は真っ青な顔で戻ってきて、「広島に向いているガラスが全部割れています」と報告しました。そこは広島から10キロ以上離れた場所だったので、私はそんなことはないだろうと思い、自分で確認にいきましたが、広島側のガラスが全部割れており、住民がみんな外に出てきて「なんで割れたんだろう」と不思議そうにしていました。その時点では、みんな何があったかは分かっていなかったからです。私たちは、これは大変なことになっていると思い、すぐに広島へ向かうことにしました。しかし、機関車に戻ると女の人が一人、車輪につかまって泣き叫び何かを訴えていました。どうしたのか聞いてみると、その女の人の旦那さんが広島側にある己斐駅の近くで働いているようで、私も広島に連れて行ってほしいと言ってしがみついていた。一般市民を乗せてはいけないのですが、機関車にしがみついてしまってどうしようもなかったもので、仕方なく乗せることにしました。

そうして、己斐駅(現在の西広島駅)の近くまでやってくると、線路は飴のようにぐちゃぐちゃに曲がってしまい、枕木はふっとんでいました。これ以上、機関車では進めないの、兵隊を2班に分けて、山手側と海側からのルートで広島へ向かいました。

司会

己斐駅はどのような様子でしたか。

藤森さん

己斐駅では、おそらく切符を買っていた人たちが、5,6人並んだままパタッと倒れていました。着ているものも真っ黒になって破れてしまい、髪の毛も焼けていました。5,6人が同じように亡くなっているのを見てびっくりしました。そして、先へ進んでいくと、機関車に乗ってついてきた女の人が、旦那さんを見つけたのか、石畳の上で男の人のそばに座っていました。何をしているのかよく見ると、男の人の頭は割れてしまい、脳みそが飛び出していたので、女の人はそれを手で戻そうとしていました。私はた

だ手を合わせるしかできませんでした。そのときの気持ちは言い表しようがありませんし、そのような光景を今でも思い出すことがあります。そこから先で見かけた人は、みんな倒れて普通に動いている人はいませんでした。倒れてしまい目だけがぱちぱちと動いているか、うめいて何を言っているのか分からないような人ばかりでした。かろうじて話せる人がいて、「兵隊さん、水」と言っているから、水筒を口元まで持って行ってやっても、飲む人はいませんでした。水筒が口元に近づくと、なんとなくニコッと笑ったような表情をして、そのままバタッと亡くなってしまいました。そのほかにも、小さな声で「お母さん、お母さん」と言いながら亡くなっていく人もいました。時々、5、6人がミイラのようになって、歩いている様子を見かけましたが、1人、2人と順にバタ、バタと倒れていきました。

私が広島市内に入ったのは原爆が落ちてから3時間後くらいだったと思います。

司会

そのあと、藤森さんはどうされましたか。

藤森さん

数日間、ケガをした人たちの救援活動と鉄道復旧に専念しました。

二、三日経つと、死体が腐ってきて嫌な臭いがしました。あちこちで死体が集めて焼かれていました。水がなかったので、部下に山の方へ行かせて取ってきたりして補充していましたが、原爆の影響があったのか、私も兵隊も頭が痛くなったり、下痢をしていました。

広島にはいくつかの川がありますが、原爆が落ちたあと、多くの人が水を求めて川へ飛び込みました。飛び込むと同時に亡くなった人も多かったと思います。川は多くの死体であふれ、人間の川のようになっていました。それが、潮の満ち引きのために行ったり来たりしていました。川にあふれた死体は腐っていき、その臭いは言い表しようのないものでした。

広島駅の前では、たくさんの亡くなった兵隊が並べられている光景を見ました。つらくなり、思い出したくない光景ですが、記憶にとどめ、伝えなければならぬと思い、知人に絵にしてもらいました。

司会

そのあとも数日間、広島市内で復旧作業をされたあと、一度、岩国へ戻られたのですか。

藤森さん

8月13日だったと思いますが、部下も疲れてきており、交代して休養させなければならぬと思い、

広島での作業を一旦やめて、岩国に帰ることにしました。今から思えば、終戦まであと2日という日ですが、当時は、戦争がいつ終わるのかも分からず、敵の飛行機がまた空襲に来るのではないかと備える日々でした。13日の夜中に私は突然、目を覚まし、なぜか嫌な予感がしました。夜中に爆弾を落とされたら大変だという思いで、寝ている兵隊を全て起こして、町中にあった鉄道官舎から部隊の物資を移動させることにしました。移動する前に何人かの部下に町の人たちにも緊急で移動することを伝えさせました。そして、希望する者(移動についてきたい者)は全員連れていくことにしました。荷車に食料等の物資を乗せて運ばせましたが、部下たちは、疲れもあり不満そうに運んでいました。町の人たちも女性や子どもたちは私たちについてきました。町から少し離れたところへ物資を移動させるのが終わったころには、夜も遅かったので竹やぶなどで野宿することになりました。そして、朝になると、たくさんのB29が岩国にやってきて駅周辺一帯が空襲にあいました。私は、竹やぶからその様子を見ていましたが、爆弾の衝撃はすさまじく、両手で竹を持っていても地面がゆれ、立ってられないような状況でした。その空襲のあと、駅周辺に大きな穴がいくつも出来ていました。移動した私たちは助かりましたが、終戦の前日の空襲により、岩国では多くの方が亡くなり、鉄道官舎に見張りのために残してきた部下も十数名が亡くなりました。

その後、また広島に戻り、復旧作業などをして、終戦の日を迎えました。

司会

最後に、この戦争体験を話すことで藤森さんが伝えたいことについてお願いします。

藤森さん

戦争によりたくさんの人たちが亡くなり、想像を超える苦しい思いをした人たちがいます。原爆は本当に恐ろしいものです。原爆は絶対にいけません。二度とそのような思いをすることがないように、当時のことを話し、平和の大切さを伝えたいと思います。私の話を聞きたくないという子どももいるかもしれませんが、子どもたちにとって何か役に立つ部分があるだろうと思って話しています。

平和な社会を守り、それを子どもたちに継承していくのが、私たちの使命だと思います。

司会

貴重なお話をありがとうございました。